

# 当院におけるBH穿刺の導入経験

愛知県厚生連 海南病院  
透析センター

# 目的

透析治療の長期化による穿刺頻度の増加、高齢者や糖尿病腎症の増加に伴い穿刺による血管の損傷が危惧されている。そこで、バイオホールスティックを用いず、穿刺痕へ反復挿入するボタンホールの導入経験を報告する。



# 方法

2005年1月より当院の維持透析患者  
(自己血管105人、Thoratec 18人、  
Advanta PTFE 2人、Advanta PTFE  
VXT 1人)を対象に通常針の穿刺孔に  
ダルニードル カニューラ針(D針)又は  
ペインレスニードル(P針)を用いて反復  
挿入にてボタンホールを作成した。



# ボタンホールへの穿刺針



ペインレスニードル  
EB18GHCLs × 1" PP PL(K)



ダルニードル  
NSL-16 C4 × 1・PP RD GA

鈍針のため誤穿刺防止にも有用



# ボタンホール穿刺の準備



かさぶた(痂皮)を取り除く



イソジン又は1%イソジンにて消毒



止血バンドで駆血をして挿入する



# ボタンホール穿刺の導入数

総数126人

作成血管	D針(人)	P針(人)
自己血管	101	4
Thoratec	18	
Advanta PTFE	2	
Advanta PTFE VXT	1	



# 現在の穿刺状況

作成血管	D針(人)	P針(人)	通常外套針(人)
自己血管	55	3	
Thoratec			19
Advanta PTFE	2		
Advanta PTFE VXT	1		1*

\* BH穿刺導入予定



# 結 果

- 穿刺痕へ反復挿入はダルニードルでも可能であり、バイオホールスティックは不要であった。
- Thoratecは導入1年後に全症例を中止した。
- 感染は自己血管が4例、Thoratecが2例発生し、Thoratec 2例はopeの適応となった。
- 止血が困難な症例は無かった。



# ThoratecでのBH穿刺

- 人工血管の組織化が無いいため、針が血管の上を滑り挿入が難しかった。
- 挿入時の反復する滑りによる刺激が、皮下組織を硬化させ3～4ヶ月で挿入困難になった。
- 挿入が難しいため、何回も挿入を繰り返しやすい。シャント感染の原因と考える。



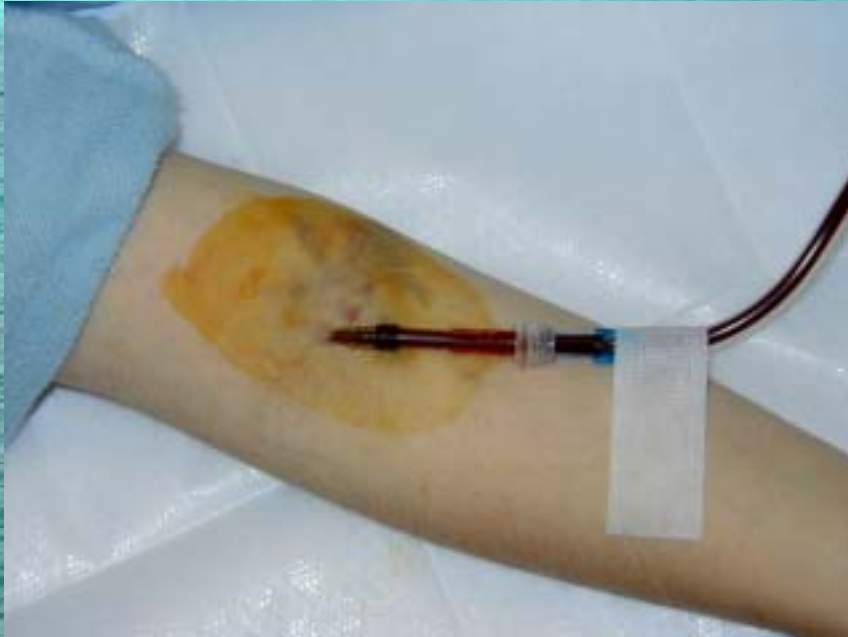
# PTFEでのBH穿刺

- Advanta PTFEでの挿入は、自己血管の感覚に近く挿入しやすかった。
- 即穿刺できるAdvanta PTFE VXTを導入したが、浮腫によりOPE直後からのBH穿刺は困難であった。OPE 後2週間～1ヶ月でBH穿刺に切り替えるのが望ましいと思われた。
- Advanta PTFE VXTでの挿入も、自己血管の感覚に近く挿入しやすかった。



# 穿刺困難例でのBH穿刺導入

穿刺困難が多い潰瘍性大腸炎



週1回のLCAPでainless  
ニードルの19Gを使用した。



# 結 語

バイオホールスティックを用いない反復挿入は、ボタンホールの作り直しが容易であった。また、スタッフ全員がBH穿刺に慣れ、特別な穿刺法と意識させないことでBH穿刺が普及出来た。